

銚子のスポーツ(野球編)

銚子は千葉県の東に在り、江戸時代から東北諸藩の物資の江戸への中継地として、又、銚子の産業である海産物、農産物そして、醤油等の醸造業も盛んで利根川の水運をもって江戸までの物資輸送の地として大いに栄えたのです。

明治33年に千葉県銚子中(現千葉県立銚子商業高校)に東京から赴任してきた教師によって銚子の野球が始まったと伝えられています。

銚子の基幹産業である漁業を中心とした水産関係ですが、海での漁が有りお金が入ればおおいに使い、漁がない時などは全くお金がなくなってしまうと言った生活、熱し易くて冷め易い気質でした。又、荒海に挑んでゆく漁師の心意気、気は荒いなど勝負事を好む土地柄で、当時娯楽のなかった時代の銚子に野球が根付く土壤があったと推察できるのです。

筆者は昭和22年生まれですが、物心が付いたときにはすでに野球を始めていたほど銚子の野球熱はさかんだったのです。大人の誰もが野球をやっているからこそ子供達までが強い影響を受けるのは当然の成り行きなのです。

銚子市内で一番盛んであった頃は、町内大会はじめ、漁協大会、農協大会、会社対抗戦など100チーム以上もあり、小学校市内大会、中学校市内大会となると全校応援で互いにライバル心むき出しで戦い、校歌、応援歌で母校愛を育み、地域の住民も参加し、さながら地域対抗戦の様相を呈し銚子全体が燃え上がったのです。

そんな野球熱の中心にあったのが、千葉県立銚子商業高校だったのです(以下銚子商業)。初めて銚子に野球を発信したのが銚子商業ですから当然でしょう。

昭和28年の全国選抜大会出場をはじめとして、昭和33年、36年と夏の全国甲子園大会に出場し、銚子市内はもちろん、東総地区、利根川を挟んだ神栖地区の全ての子供達の憧れの的となったのです。優秀な選手が集まりますます強力になって行ったのです。

これらの活躍の陰には優秀な指導者が居た事を忘れてはなりません。昭和37年には銚子市立第一中学校から斉藤一之監督を招聘して、銚子商業の全盛を迎える事になったのです。

監督就任2年目にして夏の甲子園大会出場を果たし、その2年後は(筆者3年生)夏の甲子園大会で惜しくも決勝戦で敗れたものの準優勝を果たしたのです。その後、苦節9年待望の夏の甲子園全国優勝を果たすに至ったのです。

斉藤一之監督は就任中春、夏の甲子園大会に11度の出場を果たし、銚子と云えば野球と言われる程「野球の街銚子」を全国に知らしめる功績を遺したのです。

銚子商業の全国的な活躍でますます銚子市内の野球熱は高まり、それに負けじと市立銚子高校、市立銚子西高校も強力なチームを作り上げ互いに競い合い、昭和54年には市立銚子高校が夏の甲子園大会に初出場し、昭和56年に市立銚子西高校が決勝で銚子商業を破って夏の甲子園大会に初出場したのです。

甲子園球場には大漁旗がアルプススタンド一杯に振られ、「野球の街銚子」と共に「漁業

の街銚子」を、豪快な応援で選手を勇気づけ全国にアピールしたのです。又、甲子園球場に応援に行けない市内ではテレビ放送の時間には、漁は中止し街には全ての人影が消える程テレビの試合に熱中したのです。そのような気性のため、エラーや敗戦した時などは容赦のない罵声が選手に浴びせられる事は当然の如く行われていたのです。

千葉県大会の予選で負け甲子園に出場出来ないで銚子に帰ってくるときは、市内のファンが寝静まった頃に帰宅すると云った苦労を選手はしていたのです。しかし、勝てば大いに褒め、励まし応援してくれるので、それらを励みとして選手たちは勝利に向かって頑張れたのも確かなのです。

銚子商業は現在まで春夏甲子園大会に20度の出場を果たし、優勝1度、準優勝2度、国民体育大会(国体)では優勝2度、準優勝1度と輝かしい成績を残しています。通算成績は39勝18敗。

この様な活躍の中でプロ野球に進んだ選手は銚子商業から20名、市立銚子高校からは7名の合計27名を数えるに至っています。

千葉県内の一つの市でこれほど甲子園出場している他の市はないのです。又、多くのプロ野球選手を輩出している市は他にないのです。

主な選手を挙げると、銚子商業からは木樽正明(筆者)が昭和40年の夏の全国甲子園大会で準優勝を果たし、東京オリオンズ(現千葉ロッテマリーンズ)に入団し、最多勝利投手賞、最優秀防御率賞、パリーグ MVP 賞はじめベストナインなど。1974年昭和49年度の夏の全国甲子園大会で優勝したメンバーでは、エースの土屋正勝投手はドラフト1位で中日に入団し、篠塚和典選手は巨人軍にドラフト1位で入団。首位打者賞2度、ゴールデングラブ賞、ベストナイン等活躍。他に杉山茂選手は巨人軍に入団しバッテリーコーチ、トレーニングコーチとして長嶋茂雄監督を支えました。渡辺進選手はヤクルトスワローズで選手として広岡監督時代の黄金期に、野村監督とはコーチとして共にヤクルトを支え在籍42年間。又、根本 隆選手は日石(現エネオス)から大洋ホエールズ(現 DeNA ベイスターズ)にドラフト1位で入団。宇野 勝選手も中日ドラゴンズに入団、本塁打王ほかベストナイン3度と活躍しました。

一方、市立銚子高校からは石毛宏典選手が駒沢大、プリンスホテルから西武ライオンズにドラフト1位で入団、新人王、MVP 賞、ベストナイン、ゴールデングラブ賞を獲得。又、銚子利夫選手は市立銚子高校が初めて甲子園出場した時のエースで、法政大学からドラフト1位で大洋ホエールズに入団。その他多くのプロ野球選手を輩出しています。

銚子商業が2005年の甲子園出場を最後にその後途絶えています。全国的に近年私立高校が台頭し高校の名声を上げる手段として甲子園出場を目指すようになり、全国から優秀な選手を勧誘している状況です。かつて優秀な選手達が銚子市内に集まった流れが逆に市外、県外に流れるのが近年の状況です。

銚子市の少子高齢化の波は例外ではなく、又、スポーツの多様化も有って年々野球人口の減少が見られます。「野球の街銚子」の復活を夢見ている市民、県民いや全国の野球ファンの為に銚子市民上げて力強い支援をしなくてはなりません。